



写真 235 被災した異人館（うろこの家）（神戸新聞社提供）

れた。そして、外国人県民自身が、「支援」される存在にとどまるのではなく行政に主体的に参加し、外国人県民が暮らしやすい環境を作り出していく基盤が形成されたのである。

第六節 観光ひょうごの復興とツーリズムへの変革

一 観光ひょうご復興への始動

観光資源の
被害状況

平成七（一九九五）年一月十七日の阪神・淡路大震災は、被災地の観光資源や宿泊施設に大きな被害を与えた。

神戸観光の柱ともいえる神戸北野の異人館街では、代表的な異人館である「うろこの家」（旧ハリヤー邸）の塔が傾き、「風見鶏の館」（旧トーマス邸）の三本の煙突のうち二本が倒れたほか、全ての異人館が被害を受けた。旧居留地では、「旧神戸居留地十五番館」が全壊したのをはじめとし、周辺の多くの建築物が大きく損なわれ、取り壊さざるを得なかった。神戸港は、クルージング船等に被害はなかったが、中突堤、メリケンパーク、ポートターミナル等の岸壁が大きく損傷し、機能自体に大きな制約を受け、観光的魅力も損なわれた。



写真 236 岸壁が損傷した神戸港（朝日新聞社提供）

していたが、液状化対策が施されていたこともあって、建物自体の損傷はなく予定どおりに開業した。一方、神戸旧居留地にあった旧オリエンタルホテルは地震による被害が大きく、取り壊しとなった。

有馬温泉では、被害の大きい旅館もあったが、修復作業が早かったことによりほとんどの旅館が早期に営業を再開した。しかしながら観光客は大幅に減少した。

淡路島においても、瀬戸内海国立公園の東端に位置し、震源地に最も近い島北部の北淡町（現淡路市）・津名町（同）・津名郡一宮町（同）の旅館等は大きな被害を受けた。観光施設では、津名町の「おのころ愛ランド公園」は、被害の後いち早く修復し、三月一日に再開した。洲本市、淡路島南部の旅館・ホテルに大きな被害はなく、国道や県道の大部分も無事であった。しかし、震災以降、淡路島は震源地に近いこともあって

宿泊施設についても大きな被害が生じた。ホテルオークラは、新耐震基準で建築されていたこともあり、建物自体の損傷は大きくはなかったが、各棟を結ぶジョイント部分のパイプ類が切断され、ライフラインが使用不可となった。三月一日より営業再開したものの、七月頃に入るまで利用者回復の兆しはなかった。神戸ポートピアホテルは、施設等は無事だったものの、ポートアイランドと市街地を結ぶポータルライナーが停止し、客足は途絶した。ポータルライナー開通後も、利用者は低調のままとなった。平成七年七月十五日のオープンを目指して工事中であった神戸メリケンパークオリエンタルホテルは、神戸港中突堤の先端部に位置

イメージが悪化し、三月までは来島者がほとんどなく、その後も客足は大きく落ち込んだ。

復興キャンペーン 観光産業の早期復興を図るため、平成七年七月二十六日に観光関連四九団体から成る「観光復興計画」と観光の復興計画 光ひょうご」復興キャンペーン推進協議会が設立された。兵庫県出身の俳優浅野ゆう子

を「ひょうご観光大使」に選び、平成七年度から九年度に、事業費約五億七〇〇〇万円をかけて、全国的な縦断キャンペーンを実施した。平成七年七月策定の「阪神・淡路震災復興計画」において、観光は「集客型産業の振興」として位置づけられ、一一事業が取り上げられた。この中には、観光系の人材養成機関（観光大学など）の設置や、大規模集客施設（テーマパーク）構想の推進など当初の目標を達成できなかったものもあるが、体系的な指針に基づいて観光復興の事業展開が図られたといえよう。

神戸ルミナリエ 「神戸ルミナリエ」は、震災犠牲者への慰霊と鎮魂の意を込めた「送り火」として、また被災地の復興・再生への夢と希望を託して開催された。さらに、阪神・淡路大震災の影響によって観光客が激減するなど、大きな打撃を被った観光産業に対する施策としての意味合いもあった。

開催を目指し、県、神戸市、兵庫県観光連盟、神戸商工会議所などを構成メンバーとする「神戸ルミナリエ実行委員会」が組織されたが、最大の課題は開催費用の捻出であった。県や神戸市は応急復旧・復興が最優先の課題で、財源をイベント経費に回す余裕はなく、神戸経済界もほとんどの企業が被災し協賛金を求めることができない状況にはなかった。そこで、大阪に本社を置く企業等に協賛金の拠出を要請したところ、一四社から四億五一〇〇万円の協賛金の拠出があり、開催を実現できた。

こうして、平成七年十二月十五日から二十五日までの一一日間、神戸の旧居留地一帯で開催された「神戸



写真 237 北淡町震災記念公園 野島断層保存館

ルミナリエ」は当初予想の七〇万人を三倍以上も上回る二五四万人もの人々が訪れた。震災の影響が色濃く残る街並みに灯された荘厳な光の芸術は、被災地の人々に大きな感動を与え、その心にも希望と勇気の明かりを灯した。その後、「神戸ルミナリエ」は毎年十二月に開催されるようになり、震災の記憶を引き継ぐイベントとなった。

二 明石海峡大橋の開通等による観光復興

大橋開通に湧いた淡路島観光

平成十年四月五日、「明石海峡大橋」が開通した。地元の長年の念願を叶える、まさに「夢の架け橋」であった。平成元年の瀬戸大橋の開通に続き、本州と四国間の二本目のルート

「神戸淡路鳴門自動車道」が全線開通し、西日本交通網の新たな動脈が動き出した。大橋は、本州側の神戸市垂水区東舞子町と淡路島の淡路町松帆（現淡路市）を結ぶ、全長約四キロメートルに及ぶ吊橋である。昭和六十三（一九八八）年五月に着工、総工費はルート全体で一兆三六〇〇億円という巨大な国家プロジェクトであった。輸送機能を担うだけでなく、集客機能があり、さらに周辺に観光関連施設が立地し、相乗効果が図られた。

野島断層保存館のある「北淡町震災記念公園」は、大橋の開通にあわせて開園し、大橋との相乗効果で平成十年度は二八〇万人もの入館者を記録したが、その後入館者の大幅な減少が見られた。



写真 238 ときめき明石・海峽まつり'98 オープニング記念式典 (明石市提供)

「おのころ愛ランド」は県と津名町が中心となって運営していたが、平成八年に県が過半を出資する第三セクターを設立し、十年三月に「淡路ワールドパークONOKORO」としてリニューアルオープンした(現在は株式会社ONOKOROが運営)。平成十年度の入園者数は一〇〇万人を超えたが、十二年度以降は三〇万人程度で推移している。

大橋の神戸側のたもとの海浜公園「アジュール舞子」は平成十年七月に開園した。海水浴客に人気で、利用者数は、平成十年の七〇万人が十一年は一〇五万人と増加したが、その後集客が伸び悩む中、砂浜にくぼみが見つかり、安全上、十四年六月から立入禁止となった。

神戸市営の「舞子ビラ」は、市が土地・建物を銀行団に信託するという民間活力を用いた手法により、約一三五億円をかけて新本館建設・旧別館改修などを行い、平成十年九月に「アジュール舞子」がオープンした。

大橋近くの明石側には、平成九年五月に「大蔵海岸公園」が開園した。同公園を主要会場に平成十年三月から八月に「ときめき明石・海峽まつり'98」を開催し、一三二万人の観客を集めた。その後、公園利用客は平成十二年度に一〇〇万人近くまで増え、公園で行われる花火大会には多くの観客が詰めかけた。しかし、平成十三年七月、歩道橋での雑踏事故が発生し、以後花火大会は中止となった。また、同年十二月、公園で砂浜陥没事故が発生したことから、十四年からは海水浴場も閉鎖した。

前述の「観光ひょうご」復興キャンペーン協議会」は、十年六月に「観光ひょうご」復興推進協議会」に改組された。大橋開通で増加した観光客の定着と県内全域への観光客の周遊性を高めるために、「阪神・淡路百名所」の公募・選定などに取り組んだ。

三 観光からツーリズムへ

創造的復興を
象徴する事業
000「See 阪神・淡路キャンペーン」などの震災からの「創造的復興」を象徴する事業が展開された。

平成十二年から観光の本格復興期に入るが、この時期には、淡路花博「ジャパンフローラ2



写真 239 淡路花博ジャパンフローラ 2000

淡路花博は、明石海峡大橋の開通にあわせて、平成十年四月に開催する予定であったが、震災の影響で二年遅れた。十二年三月十八日に開幕し、九月十七日に閉幕した。淡路花博「ジャパンフローラ2000」は、「人と自然のコミュニケーション」をテーマに、阪神・淡路大震災からの復興アピールも目的としていた。世界から七九カ国・地域・都市と国内二五九団体が参加し、一七〇〇種一五〇万本の花を展示した。一八四日間の会期中の総入場者数は、当初の目標五〇〇万人を大幅に上回り、六九四万五三三六人を記録した。国内各地からの幅広い来場者に加え、中国観光団体ツアー解禁第一号の観光客が入場したのをはじめ、海外からも予定していた約五万人が入場する

など、国際博としてのにぎわいを見せた。期間中一〇四〇回のイベントが開かれ、三三方国・地域の大使、領事らを招いたナショナルデーは延べ五九日間実施された。

被災した阪神・淡路地域の集客力アップを狙った観光イベント「See 阪神・淡路キャンペーン」は平成十二年十月から十四年三月まで行われた。「ひょうご二一世紀記念事業」の一環として、県、被災一〇市一〇町をはじめ阪神・淡路地域の官民の団体で実行委員会を組織し、神戸ルミナリエ、明石海峡世紀越えイベント、神戸二一世紀・復興記念事業の諸事業や、被災地の多彩な魅力を紹介する「阪神・淡路一〇〇名品・一〇〇グルメ」事業などを支援した。

コンセプトは「Thanks & Welcome ありがとう、そしてようこそ」、キャッチフレーズは「Big Birth っかい未来が生まれるよ」で、イメージキャラクターの元大関KONISHIKIと子どもたちがともに歌うキャンペーンソングも作られた。同キャンペーンとして支援した中核イベント一九件（神戸ルミナリエを除く）で、目標の集客数五〇〇万人を超える五〇四万人を達成した。

復興まだら模様
の観光関連施設
復興まだら模様
の観光関連施設
開（十三年三月）、国民宿舎「摩耶ロッジ」をPFI手法（民間資金等の活用による公共施設等

の整備）でリニューアルし開業した「オテル・ド・摩耶」、神戸ポートタワーのリニューアル開業（十三年三月）、神戸ウイングスタジアムの改築・開業（十三年十一月、現ノエビアスタジアム神戸）が挙げられる。

また、淡路花博に合わせて開業した「ウェステインホテル淡路」（平成十二年三月、現グランドニッコー淡路）、花博後同地に開園した「淡路島国営明石海峡公園」（十四年二月）、HAT神戸に開館した「人と防災未来セ



写真 240 淡路島国営明石海峡公園（淡路島観光協会提供）

ンター」（「防災未来館」（十四年四月）・「ひと未来館」（十五年四月））がある。平成十四年の2002 FIFAワールドカップは、日本列島をサッカー一色に包み込み、観戦のために多くの外国人が訪れるなど我が国の観光にも大きな影響を与えた。県内では、例えば、イングランド代表が滞在した津名町のサッカー場は入場客が増え、選手団が宿泊した「ウエスティンホテル淡路」の宿泊客も増加した。

一方で、震災と長期の景気低迷の影響を受け、閉鎖等に追い込まれる観光関連施設も数多くあった。震災直後に大型プールを備えるレジジャー施設であった六甲A O I A（平成三年開業）が閉園した。神戸ローザンヌホテル（神戸市東灘区）は平成九年に開業したがわずか一年で廃業となり、七年に開業したミュージアムパーク「アルファビア」（洲本市）は十二年十二月に閉館した。また、平成十四年二月には経営不振に陥ったフルーツパラワーパーク（神戸市北区）に対して、神戸市が金融支援を実施した。このほか舞子タワー閉館（十四年三月）、姫路セントラルパーク民事再生法適用（十四年八月）、六甲山「十国展望台」閉館（十四年二月）、西宮スタジアム営業終了（十四年十二月）、ウエスティンホテル淡路を県が買収（十五年三月）した。平成十五年には、遊園地の宝塚ファミリーランド、阪神パークが閉園し、阪急が神戸ポートピアランドの経営から撤退した。

ツリーズ 「兵庫県観光振興基本計画」（平成二年策定）に引き続いて、ひょうごツリーズミュージオンが平成十四年四月に策定された。同ビジョンでは、バブル経済の崩壊等の影響により経済的な豊かさ



写真 241 ひょうごツーリズム協会設立

の限界があらわになったことで、多様な価値観に基づくライフスタイルの広まりや余暇活動の範囲の拡大など「観光」をめぐる変化があったとする。

これらの変化を踏まえ、従来の「観光」に替えて、レジャーのみならず、自己研鑽、コミュニティ活動、ボランティア活動、ビジネス等の目的で、一時的に通常の生活拠点を離れ、旅行・滞在する「ツーリズム」を、民間と行政が相互に協力して振興を図ることとした。

ツーリズム振興の目指すべき将来像の基本コンセプトとして多彩な地域特性を生かしたツーリズム振興を掲げた。その実現に向けて、ツーリストの多様なニーズをきめ細かく把握した地域マーケティングに基づいた戦略的な展開が必要であるとし、目標に「平成十七年度のツーリズム人口一億五〇〇〇万人」とすることを掲げ、①学習・体験・交流型のツーリズムの振興、②個性を生かした美しい地域づくり、③公民連携の中核的推進体制の整備を推し進めた。また、幅広いツーリズム関係者の連携によるプログラムの推進を図るため、兵庫県観光連盟を改組して、「ひょうごツーリズム協会」を設立し、民間人材を積極的に活用しながら、公民協働による新たな戦略の検討、ツーリズム資源の開発、総合的な情報発信、人材育成、地域間連携のコーディネートなどに取り組みこととした。あわせて、県内市町や企業・民間団体やNPO等が取り組むツーリズム振興事業に対してアドバイス、コーディネートを行う「ツーリズムプロデューサー」を設置した。

こうした中、県農林水産部は、平成六年三月に「ひょうごグリーンツーリズム推進マニュアル」を策定し、十三年度からグリーン・ツーリズムバスの運行支援事業を展開した。

さらに地域限定で規制緩和を認める構造改革特区制度において、平成十五年度以降、北但馬一市一〇町を対象に株式会社や集落、NPO法人に市民農園の貸付を認める「グリーンツーリズム」、国立公園内のイベント開催手続きを簡素化する「くにうみツーリズム」や「六甲有馬観光」、NPO法人や商工会が旅行業に容易に参入できるようにする「北はりまツーリズム」や「たんばツーリズム」などの認定がなされた。

このほか、神戸商工会議所では、平成十五年に「産業ツーリズムアドバイザー」を任命し、閉鎖された発電所の煙突や老朽化した工場などを「産業遺産」として掘り起こし、県外、海外に情報発信できる取組を進めるなど、ツーリズムの裾野に広がりが見られた。

四 震災復興期における県内観光動態の推移

阪神・淡路大震災以降の県内観光動態の推移について、復旧期（平成七年度から九年度）・復興初期（十、十一年度）・復興本格期（十二年度から十六年度）に分けて概観する。

復旧期の県内観光客動態 平成七年度の観光客入込数は八八八万人と、前年度一億八三二万人の八割程度にとどまった。丹波を除く全ての地域で減少し、特に、神戸・阪神が三七〇八万人（対前年度比七一・四％）、

淡路が六〇一万人（七六・二％）と激減した。

平成八年度は、神戸ルミナリエや「ときめき神戸 観光キャンペーン」、「神戸まつり」などのイベントが

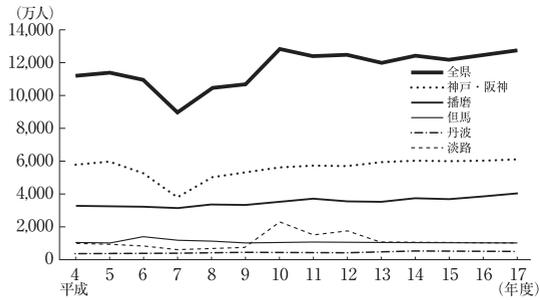


図 122 地域別の観光客入込数の推移
〔「観光客動態調査」より作成〕

一定の効果を上げ、県内の観光客入込数は一億四三三万人（二一七・四％）と一億人台を回復した。地域別では、神戸・阪神が四九五二万人（二三三・五％）と急激な回復を見せ、淡路も七〇三万人（二一七・〇％）と地震による被害が大きかった二地域では大幅に増加した。しかし、震災前の平成五年度（神戸・阪神五九二六万人、淡路八八九万人）の水準は下回った。

平成九年度は、一億六四二万人（二〇二・〇％）で、前年度と比較すると二〇九万人増加した。地域別では、神戸・阪神は、風見鶏の館再開や六甲アイランドの神戸ファッション美術館開館などがあり、全体で五二〇二万人（一〇五・一％）と前年度に比べ増加した。淡路は、淡路ワールドパークONOKOROのリニューアルによる休園はあったが、七二二万人（二〇二・九％）と前年度を上回った。播磨は、三三二一万人（九八・七％）と前年度を下回った。

た。但馬は夏の荒天による海水浴客の減少や雪不足によるスキー客の減少など天候不順により、一〇一二万人（九三・五％）となった。丹波は、平成九年三月のJR福知山線篠山口駅までの複線化等により三九四万人（二一四・八％）となった。

復興初期の県内観光客動態

平成十年度の県内観光客入込数は、震災前の五年度（一億二二九六万人）の水準を上回り、一億二七一三万人（対前年度比一一一九・五％）で過去最高となった。特に、明石海峡大橋開通の効果で、淡路は二二九八万人（三一七・六％）と大幅に増加した。播磨は平成十一年一月から放送され



写真 242 北野工房のまち

たNHK大河ドラマ「元祿繚乱」関連の施設への入込増により、三四八七万人（二〇五・三％）と増加した。一方で、丹波は三九六万人（二〇〇・七％）と微増で、但馬は一〇〇〇万人（九八・八％）と減少した。

平成十一年度は一億二二六五万人（対前年度比二・九六・五％）と四四八万人減少した。淡路は一五〇三万人（六五・四％）と前年度を大きく下回ったが、大橋開通前の二倍以上の水準であり、大橋効果は継続したといえよう。神戸・阪神は五六九二万人（二〇二・九％）と、廃校となった旧北野小学校を活用し、菓子づくり体験などができる観光スポット「北野工房のまち」やアウトレットモール「マリニピア神戸」などの新規オープン施設への来場者が多かった。播磨は三六七七万人（二〇五・四％）、丹波は四〇一万人（二〇一・〇％）で、但馬は九九三万人（九九・三％）と天候不順で海水浴やスキートの客足が遠のいたことが影響し、前年度と比べ減少した。

復興本格期の

県内観光客動態

平成十二年度の県内総入込数は、淡路花博ジャパンフロラ2000の開催が全体を引き上げ一億二二七八万人（対前年度比一〇〇・九％）となった。その後、平成十五年度の新型コロナウイルス（SARS）による国内観光の不調の影響もあったが、おおむね増加傾向を続けたが、前述のひょうごツーリズムビジョンの目標「平成十七年度のツーリズム人口一億五〇〇〇万人」については、大型の観光関連施設の閉鎖もあり、十七年度で一億二六八万人となり達成できなかった。

この時期は、「日帰り客や県外客、自家用自動車利用者のウエイトが高まった」「神戸市内を中心に都市市



写真 243 神崎農村公園ヨーデルの森（神河町観光協会提供）

テルの利用が高まった」「ツーリズム型入込数が大幅に増加した」ことなどが特徴として挙げられる。

地域別では、神戸・阪神は、平成十三年度の「神戸二一世紀・復興記念事業」の影響で五八九七万人（二〇四・五％）と大幅に増加し、震災前の五年度（五九一六万人）の水準をほぼ回復し、阪急西宮スタジアムや宝塚ファミリーランド、阪神パークの廃園の影響があった平成十五年度を除き、増加基調で推移した。播磨は、平成十三年度の明石市の花火大会の事故や蔵海岸の陥没事故による減少影響を受けながらも、十四年度の「ひまわりの丘公園」（小野市）、「神崎農村公園ヨーデルの森」の開園や、十七年度「いなみのため池博覧会」、「三木総合防災公園」のグラウンドオープンなどにより増加基調で推移した。但馬は、夏の海水客と冬のスキー客の低迷が続いた。特に平成十六年度は台風第二三号をはじめ相次ぐ台風の到来により、九五九万人（九六・六％）と大きく落ち込んだ。しかし平成十七年度はコウノトリの放鳥効果などで増加（九九六万人、一〇三・八％）に転じた。丹波は、平成十五年度（四九九万人、九七・二％）に微減した以外は、元年度以降、増加を続けた。平成十七年度は兵庫陶芸美術館の開館などの効果もあり過去最高水準（五二八万人、一〇二・八％）となった。淡路は、平成十二年度の淡路花博効果により大幅に増加（二七三万人）して以降は十二年度の六割程度で推移した。ただし、明石海峡大橋開通前の約一・五倍の一〇〇〇万人台となっている。

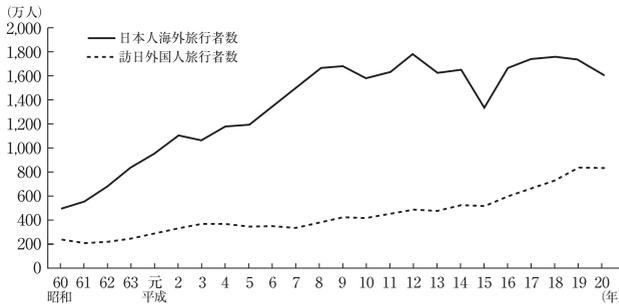


図 123 日本人海外旅行者数・訪日外国人旅行者数の推移
(国際観光振興機構ホームページより作成)

五 本格的な国際ツーリズムへの展開

昭和六十一年の円高不況後も、日本の大幅な貿易黒字に起因する欧米との間の貿易摩擦を背景として、日本人の海外旅行を促進するための政策が展開された。他方、訪日外国人旅行者数は、円高による負の影響を受けながらも、総じて見れば増加傾向を維持していたが、日本人の海外旅行者数との差は拡大した。

こうした中、国は平成三年、双方向の観光交流の一層の拡大を目的とした「観光交流拡大計画 (Two Way Tourism)」を策定したが、日本人の海外旅行者数と訪日外国人旅行者数の乖離は拡大し続けた。平成七年には、日本人海外旅行者数は一五三〇万人に達したのに対し、訪日外国人旅行者数は三三五万人にとどまった。

国は、訪日外国人旅行者の誘致に政策の軸足を移し、平成八年、訪日外国人旅行者数を十七年時点で七〇〇万人に倍増させることを目指した「ウェルカムプラン21」を取りまとめた。翌平成九年には、地方圏への誘客を促進するため、「外国人観光旅客の来訪地域の多様化の促進による国際観光の振興に関する法律」を制定した。

この間、アジアからの訪日旅行者数が訪日外国人旅行者数全体の六割を超えるようになり、アジアを重点として戦略的な訪日外国人旅行者の誘致活動が行われるようになった。特に、平成十二年には、中国からの団体旅

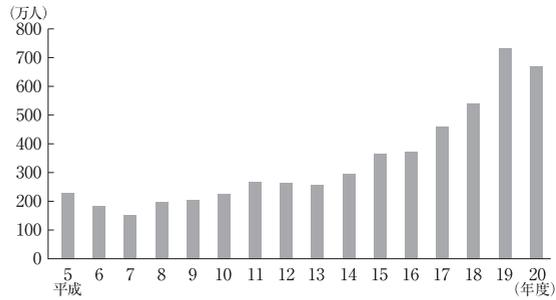


図 124 兵庫県への訪問外国人旅行者数の推移
 (「訪日外客訪問地調査」より作成)

行が開始され、その後の訪日外国人旅行者の構成に大きな変化をもたらした。

平成十四年二月の小泉純一郎内閣総理大臣の施政方針演説において、海外からの旅行者増大と、それを通じた地域の活性化を図るとの方針が示され、観光は国の重要政策課題となった。平成十五年には、観光振興に国を挙げて取り組み、二十二年の訪日外国人旅行者数を十四年の二倍である一〇〇〇万人とすることを目標に挙げ、様々な事業に取り組んだ。

兵庫県への訪問外国人数の推移をみると、平成五年の二二二万人が、阪神・淡路大震災の七年は一八四万人まで落ち込んだが、その後、増加に転じ十一年には二七一万人となった。国際ツーリストの増加は、ツーリズム関連産業の振興、雇用拡大への寄与だけでなく、歴史・文化等を含む幅広い魅力を再発見し、さらに他地域にない独自の魅力づくりに努めることを通じて、地域の活性化に大きな効果が期待できる。こうしたことから、県は平成十四年四月にひょうごツーリズムビジョンにおいて「国際ツーリズム行動プログラム」を策定し、十七年の兵庫県への訪問外国人数を十一年の約二倍である六〇〇万人とする目標を打ち出した。

平成十七年の兵庫県への訪問外国人数は、十三年の米国同時多発テロ、十五年のイラク戦争とSARS、十六年のスマトラ島沖地震による地震津波被害などの国際観光発展の阻害要因もある中、四六四万人と十一

年（二七二万人）の約一・七倍で、ひょうごツーリズムビジョンの目標の約二倍には及ばなかったが、全国（十一年度四二〇六万人、十七年六七二八万人）の約一・六倍を上回る伸びとなった。